小説：妹尾尻尾

イラスト：舷

目次

目次・登場人物紹介　Ｐ２
表紙イラスト　Ｐ３
本編　Ｐ４～Ｐ７０
あとがき・奥付　Ｐ７１

登場人物紹介

○羽咲　あかり／陽煌天使レイリープ

１５歳。本作のメインヒロイン。ロリ爆乳美少女。
身長１４２センチ、体重５８キロ（うち１０キロは胸の重み）。
バスト１２０センチ（Ｍカップ）、ウエスト５５センチ、ヒップ８８センチ。
無垢で、無邪気で、子供っぽい。気弱だが、誰にでも優しい女の子。
陽煌天使レイリープに変身する。

○木村　比呂

１５歳。あかりの幼馴染で、彼氏。あかりのことをいつも守っていた。
戦闘中は、ガイドの能力でステルス化している。『その場に存在しない』状態になる。

○天使　恵

先代の天使。死亡したあかりと比呂に力を分け与えた。
現在はガイド件タイムリープの鍵として、二人に付き添っている。

○海魔帝イカトパス

魔族／バージュ・マーダの幹部。
イカとタコを合わせたような異形の怪人。触手が武器。

○一般市民

瘴気／淫気に侵された一般市民は、理性のタガが外れ、欲望の赴くままにレイリープをレイプする。

キャラクター／身長差比較

羽咲　あかり　　変身後／レイリープ　　一般市民

陽煌天使レイリープ　～触手とクズ市民に処女喪失レイプされるロリ爆乳ヒロイン～

1　羽咲あかりはロリ爆乳美少女。

「あ、ヒロ君、お待たせ！」

俺――木村比呂（きむらひろ）がマンションの入口で恋人を待っていると、後ろから声をかけられた。振り返るとそこには、嬉しそうに微笑む少女がいた。

大きな瞳に長いまつげ、幼さを残した容姿、ショートカットが跳ねて可愛らしい。

小学生かと見間違えるかのような低身長。ふわふわのワンピースはかなり幅があって、なんというか横に広がっている。モビルスーツのド〇を連想させるその姿は、まるで太っているかのように見える。だがしかし――と、これを言うとこいつは怒るんだった。

「おう、あかり」

返事をする。そう、恋人というのはこいつのことだ。

羽咲（はねさき）あかり。俺と同じ１５歳で、俺の幼馴染。親同士が友達で、住んでいるマンションも近かったせいか、小さい頃から一緒に遊んでた。

「それじゃ、行こっか♪」

笑顔のまま、あかりが俺の手を握る。小さくて柔らかくて温かい手だ。身長が俺の胸辺りまでしかない彼女は、いつも俺を見上げて微笑んでくれる。

「似合ってるな、そのワンピース」

「えへへー、ありがとっ！　ヒロ君が一緒に選んでくれたやつっ！　着てみたのっ！」

嬉しそうにあかりが跳ねる。するとそのワンピースも一緒にぷにょん♡　ぷにょん♡と跳ねる。

いや、跳ねているのはワンピースではない。

胸だ。

あかりは、めちゃくちゃ胸が大きかった。

身長は１４２センチしかないのに、バストは１２０センチもあるという。その幼い容姿と低身長にはまるで似つかわしくない胸の大きさから、『ロリ爆乳』と言って差し支えなかった。

ワンピースが横に広がって太っているように見えるのは錯覚だ。ウエストはかなり細い。腹じゃなくて、胸がひたすら大きいのだった。

こいつの胸が急成長をはじめたのは小学五年生の頃。ランドセルを背負っていた年齢ですでに、バストは９０センチを超えていたという。ワンピースを好んで着るのも、大きすぎる胸が目立たないため、らしい。

低身長、爆乳、そして可愛らしい容姿。

色んな意味で目立ち、そして厄介な目に遭いやすいこいつを、幼馴染の俺はいつも守ってきた――つもりだ。電車やバスでも彼女を周りの人間からガードし、街に出るときはいつも一緒。その甲斐があったのか、あかりは生まれてから今まで一度も痴漢被害にあったことがないらしい。クラスメイトがしょっちゅう「お尻を触られた」と泣いているのを、辛そうに聞いているそうだ。

俺はあかりが子供の頃から好きだった。

あかりもそうだったらしい。

だから俺が告白したときも、あかりは涙を流して頷いてくれたのだ。

中学２年生になった夜、両片思いだった俺とあかりは、晴れて恋人同士になった。

それから一年が経って、未だにキスもできてないのは、ちょっともどかしい気がするけれど……。

――ま、仕方ないよな。

あかりと手を繋いで電車に乗り、ドア横の狛犬ポジションで彼女を抱き抱えるようにガードしながら、俺は内心でため息をつく。

あかりは「結婚するまではそういうえっちなことはしたくないの……。できればキスも、結婚式まで取っておきたいな……」という、今どき珍しい貞操観念の高い女の子だった。小さい頃からずっとそんな調子だし、思春期に入って『えっちなこと』を知ってからはますますそうなったように思える。

電車を降りた。

この辺りじゃ一番の繁華街だ。

はぐれないように、あかりとしっかり手を繋いで歩く。

人が多いと大変だ。特にあかりは、背が小さいうえに――。

「……」

「……」

「……うお」

道行く人々がチラチラと、俺とあかりを見る。いや、あかりを見る。可愛い顔と低い身長が目を引くのだろう。大抵は「なんだデブか」と言ったような顔で視線を外すが、たまにあかりの爆乳に気が付いて「うわ、あれ胸じゃん！　デッカ！」と言わんばかりにガン見してくる目ざとい奴もいる。そういときは、俺がさり気なく体を寄せてガードする。そそくさと目を背けるのがほとんどだが、中には露骨に嫌な顔をするのもいる。めっちゃムカつく。俺のあかりを視姦してんじゃねぇ。

「ヒロ君、ありがと……」

「気にすんな」

「えへへ……。ヒロ君とだと、安心して街を歩けるの、すごく嬉しい……」

一人で外出したときは、今みたいな目でジロジロ見られても我慢するしかないと、以前あかりに聞いたことがある。せめて俺といる時くらいは安心させてやりたいし、嬉しさを噛み締めるように呟くあかりが世界一可愛い。抱き締めてキスしたい。が、キスはできない。

――でも……したい……！

ぷっくらとした柔らかそうな唇を見て、力強くそう思う。

結婚するまでオアズケとか何の拷問だろうか。実はこのところ、時間をかけてあかりを説得しているが、効果は今ひとつ。いや、もうあかりと結婚することが確定しちゃっているような言い方だが……うん、正直に言うと、俺としては今すぐ結婚したいかな……。

歩道橋を登りながらそんなことを考えていると、あかりが俺を見上げて、

「どうしたの？　ヒロ君」

「え、結婚したい」

「ひょええっ！？」

橋の真ん中であかりが変な声を出した。ん、俺いま、何て言った……？

「あっ！　ま、間違えた！　何でもない、何でもないよ！」

「あっ、う、うん！　びっくりしたぁ……」

思わず立ち止まる俺たち。

あかりは、大きな胸に手を当ててふぅ～と深呼吸した。顔が真っ赤だ。たぶん俺もだ。

するとあかりは、嬉しそうにぽつりと呟いた。

「わ、私も……結婚するなら、ヒロ君みたいな人がいいけど……」

「えっ！」

「あ、ううん、何でもない、何でもないの！」

ぱたぱたとあかりが手を振る。

俺たちはお互いに真っ赤になりながら、そっぽを向いて、それから顔を見合わせると、どちらともなく笑った。

「大好きだぜ、あかり」

「うん。私も大好き。ヒロ君」

あかりを、優しく抱きしめた。彼女の小さい身体が、俺の腕の中にすっぽりと収まる。俺の背中に細い腕が回されて、俺の胸に全幅の信頼を寄せた頭が添えられる。柔らかい体温と甘い匂いが、俺に途方もない幸福感を与えてくれる。

愛されている、と確信していた。

愛していると、心から思う。

俺とあかりは、これからもこんな調子で生きていき、やがて結婚して、子供を作って、二人で末永く過ごすのだろう。そう思っていた。

ずっとこんな幸せが続くと、そう思っていた。

なのに――。

その日、俺とあかりは、魔界からの侵略者によって、粉々にされた。

2　レイリープ登場

あれから――世界各地に魔界からの侵略者が現れてから、二週間が経った。

世界のありようは一変していた。突如として出現した怪人によって街は破壊され、人々は蹂躙された。

奴らは軍隊だった。魔族の軍隊だった。

怪人が司令官だ。黒ずくめの『戦闘員』という兵隊もいた。

奴らの勢いは凄まじかった。

男は殺され、そうでなければ労働力となるべく奴隷にされ、女はその場で犯され、そうでなければ孕み袋となるべく『巣』に持ち帰られた。

凄惨な地獄の始まりだった。

人々は神に祈り、そしてそれに応えたかのように――救世主が現れた。

天使である。

彼女が言うには、『天使（じぶん）たちはずっと昔から魔族（やつら）と戦っていた』。『しかし人間たちが欲望を増大させ、人間界が淫気に満ちたせいで、劣勢となった』。『それまでは人払いの神術結界を用いていたが、ついにそれを突破された』。

だから、奴ら――『魔族／バージュ・マーダ』は現れたという。

その天使は、怪人と相打ちになり、姿を消した。死んだのか、生き延びているのか、人間でそれを知る者はいない。

比呂とあかり――二週間前に怪人の攻撃によって死亡し、そして天使に命を分け与えられて生き返った、その二人を除いて。

☆

繁華街。

時刻は正午過ぎ。

まだ魔族による被害が出ていないその街に異変が起こった。

空間を破り、タコとイカと人間を合体させたような怪人が、大量の戦闘員を引き連れて突如として出現したのだ。

魔族／バージュ・マーダ幹部――海魔帝（かいまてい）イカトパス。

禿頭で肥満の中年男性に、タコとイカを混ぜ合わせたような異形である。

上半身は人間のそれに近い。不摂生の塊のようなぶよぶよと太った肥満体である。下半身のタコイカ部分は、大量の触手を生やしていた。

全身の肌は青紫色で、頭はタコのように丸く、口の周りからはうねうねと何本もの触手が伸びている――異形の怪物。

魔族軍を率いる幹部、その一人である。

「にょーほほほほ！　恐れるが良い人間ども！　この海魔帝イカトパス様が貴様らを嬲り殺してやろう！」

イカトパスの触手が暴れ回り、周囲を破壊する。一般市民たちは逃げる間もなく襲われ、ある者は触手にぶっ叩かれて頭が弾け飛び、またある者は触手に巻き付かれて圧死した。

「うわあああ！」

「きゃあああ！」

繁華街に人々の悲鳴が響く。

それを聞き、また奏でるイカトパスが、実に嬉しそうに部下へ命令を下す。

「やれい、戦闘員ども！　男は殺し、女は犯せ！　人間界を淫気で満たすのだ！　にょーほほほほほ！」

「「アイィ！」」

黒ずくめの戦闘員どもは、人間と似たような二足歩行の怪物である。全身タイツのように見えなくもないが、奴らのそれはどちらかというと皮膚であり、未開の地でボディペイントを施す『戦士』に近い。

手に持つ武器も棍棒や槍など原始的なものが多いが、人間よりもはるかに強靭な肉体を持つため、の威力は絶大である。鉛玉を火薬で発射するよりも、その凶悪な腕力で武器を振るう方が効率が良いのであった。

そう、奴らはとても効率的だった。

実に効率よく、槍や棍棒で人間の男たちを殺していく。一足飛びで5メートルを容易く跳躍する戦闘員どもに、人間たちはなす術もなく殺される。たとえ、重火器を持っていようとも、奴らの硬い皮膚を打ち抜けない。

いまも拳銃を構えた警官が何発か発砲したが、戦闘員はびくともしない。ただの人間では、ザコ戦闘員ひとりすら倒せない。

「アイヒッヒッヒ！　愚かな人間どもめ、そんな玩具が俺たちに通じるものか！」

「貧弱で蒙昧な人間め！　自分たちの無力さを呪いながら死ぬがいい！　アイヒッヒッヒ！」

「うわぁぁ！　来るな、来るなぁ！　ぎゃあああ！」

そして、女を捕まえればその場で、集団で犯す。股間部の皮膚が変形して中に隠れていた陰茎が姿を現すまでは怪人の異様な生体の一つだが、その後は人間と同じである。膨張したペニスを捕まえた女に無理やり挿入し、射精するだけだ。人間の女を孕み袋として仲間を増やす意味もあるが、それよりも本命は、人間界に『淫気』を蔓延させることであった。淫気の濃度が高ければ高いほど、魔族の力は強くなり、奴らの目的達成に近付くのだ。

「アイヒッヒッヒ！　メスはどこだ！　メスを犯せぇ！」

「ここにいるぞ！　二匹隠れていやがる！　親子だ！　引きずりだして二匹ともマワせぇ！」

「アイヒッヒッヒ！　残念だったなぁ、人間のメスども！　お前らはこれから俺たち百人の相手をしてもらう！」

制服を着た娘と、彼女を庇う母親の声が響く。

「やめて！　お願い、娘は、娘だけは！」

「痛い、いやぁぁ！　離してぇ！　お母さん、お母さん！」

それを見た戦闘員どもが一斉に、にんまりと醜悪に微笑んだ。

「アイヒッヒッヒ！　そりゃあいい！　母親の前で娘を輪姦してやろう！」

顔面蒼白になる親子は、

「そ、そんな……！　それだけはやめてください！　私はどうなってもいいですから！」

「やだ、やだ……お母さん、お母さん！」

戦闘員どもがケタケタと笑う。

「アイヒッヒッヒ！　いいぞいいぞ！　お前たちの悲鳴をもっと聞かせろ！」

「「アイヒッヒッヒ！！」」

黒ずくめの大勢の手が、母と娘を引き離す。親子の悲鳴がより一層大きく、悲壮なものに変化する。娘の服が強引に引きちぎられ、その胸部と陰部が露わになった、そのとき――。

「そ、そこまでです、薄汚い魔族ども！　――闇を祓え、レイ・サンシャイン！」

可愛らしくも勇敢な声が響き渡ると、娘を取り囲んで今にも犯そうとしていた戦闘員どもが天から降り注ぐ光に呑まれ、一瞬で消え去った。

聖なる光で浄化されたのだ。

「アイッ！？」

「し、神術陽煌（しんじゅつようこう）……！？」

「天使かッ！」

戦闘員どもが狼狽えながら辺りを見渡す。果たして、声の主は電灯の上に立っていた。

露出度が高いピンク色の衣装を着た爆乳の小〇生――というのが、その場にいた多くがまず抱いた印象だ。

容姿は美少女といって差し支えない。くりくりとした大きな瞳の色は、わずかに赤い。髪は長く、ストレートで、染めているのかウィッグなのか、赤に近いピンク色。それがキラキラと輝いているかのように見える。

コスチュームは、白と桃色を基調にした、ボディーラインに密着したレオタードのようもの。腰にはミニスカートを穿き、ちらちらと下のショーツが見えており、扇情的だ。むっちりとした太ももには白いハイニーソックスを穿いており、もも肉がこぼれ、ミニスカートとの絶対領域がまたいやらしい。

胸は谷間がくっきり見えるほど開いている。巨大な胸が収まりきらずに溢れており、少し動くたびにたぷん♡　たぷん♡　と揺れていた。

そして身長が低い。胸はめちゃくちゃ大きいのに、背が小さいのだ。ロリ爆乳である。

恥ずかしいのだろう、その可愛らしい顔を真っ赤にしながら、それでも彼女は勇敢に叫ぶ。

「み、みんなの笑顔を守るため、陽煌天使（ようこうてんし）レイリープ、ここに参上！」

名乗りを上げると、彼女の姿がひときわ輝いた。天使のエナジーによって生み出されたオーラが発光しているのだ。

彼女――レイリープは正義のヒロインだった。ロリ爆乳の。

レイリープを見て、戦闘員たちがぎゃあぎゃあとわめきたてる。

「天使だッ！」

「我らの敵だッ！」

「またエロい奴が来たぞッ！」

「犯せッ！　捕まえて犯し尽くせッ！」

「我ら魔王のためにッ！」

戦意と肉欲に目をギラつかせ、レイリープの立つ電灯へ一斉に向かっていった。

戦闘員たちの身体能力は人間のそれを遥かに超えている。

まず三体ほどの戦闘員が電灯へ跳躍した。三方向からの同時攻撃。手に手に持った棍棒で、美少女天使をぶっ叩く。哀れ、正義のヒロインは敗れる――

はずだった。

「てぇぇい！」

「アイヤヤアアア！」

「グワアアアアア！」

「ナンデェェェェ！」

戦闘員たちが吹っ飛んでいく。その手に握られていた棍棒は全てカチ割られていた。

レイリープが手刀で砕いたのだ。

そして彼女は、神速で三人の戦闘員へ反撃を喰らわせた。黒づくめは地面に落下すると、びくびくと痙攣し、やがて動かなくなった。

たった一撃で、あの屈強な戦闘員を屠ったのである。それも三体同時に。

「バカなッ！」

「この天使、強いぞッ！」

騒然とする戦闘員たち。一方レイリープは電灯から跳躍、敵のただなかに突っ込んでいく。

「てぇい！　だあぁ！」

小さな体躯に不釣り合いなほど大きな胸をぶるん♡　ぶるん♡　と揺らしながら、徒手空拳で次々と戦闘員たちをぶっ飛ばしていく可憐な少女。

ミニスカートが翻り、純白のショーツに包まれたはち切れんばかりのヒップがきゅっ♡　きゅっ♡　と元気に跳ね動くが、それを堪能する暇はない。

戦闘員たちは混乱し、まともに反撃行動もとれず一方的にやられていく。

それも仕方のないことだ。彼らの目には、白と桃色の影が動いたくらいにしか見えない。かと思えば、いつの間にか自分が吹っ飛ばされており、そのまま絶命するのであった。

戦列も陣形も取る暇を与えられず、ちっぽけな少女に一方的に殺され、数を減らしていく。

そこへ、幹部イカトパスの叱責が響いた。

「にょほー！　何をしている貴様らっ！」

振り向いた戦闘員たちが目を白黒させながら、

「アィィ！　しかしイカトパス様ッ！　こやつ凄まじい身のこなしで――アギャッ！？」

「目視することすら敵わず――ウギャッ！」

瞬く間に1／3ほどの戦闘員たちが動かなくなった。

「にゅぶぶ……！」

イカトパスは悔しそうに顔を歪め、そして命令を下す。

「もうよいっ！　全員速やかに後退せよ！　ともかくこの場を離れるのだっ！」

「「アイアイィィィ！！」」

幹部の号令により、戦闘員たちがてんでバラバラの方向へ逃げていく。

「っ！　ま、待ちなさいっ！」

首を左右に振って追いかけるべき敵を探すレイリープ。やがて最も逃げた敵の数が多い方向を見極め、そちらへ駆けだそうとしたその時、

「貴様の相手は俺だァ！　薄汚い天使よ！」

ずしん、とオクトパスが立ち塞がった。

レイリープはしかし、

「う、薄汚い……？　え、そ、そうなの……？」

困惑する彼女だが、やがて「え、気にしなくていい？　う、うん、わかった！」と独り言を呟くと、構えを取った。

「よ、陽煌天使レイリープです！　皆を襲うあなたを許しません！　覚悟しなさいっ！」

「にょーほほほほ！　レイリープ、それが貴様の名か！　ならば俺も名乗ろう――偉大なる魔王様が配下、バージュ・マーダが幹部、『海魔帝イカトパス』とは俺のことよ！」

叫ぶと同時、イカトパスの触手が伸びる。数は十本。一本一本が丸太のように太く、ヌラヌラと粘着性の油でテカり、そして凄まじく速かった。

「てい、わぁ、たっ、たあああっ！」

レイリープは華麗に躱していく。常人には決して見えない触手の動きを、しかし陽煌天使の強化された視力はしっかりと捉えていた。

「ふっ！　はっ！」

「な、なにぃっ！？」

ばしん、べたん、どずん、と大きく重い触手の鞭が唸る。レイリープはそれらを余裕で躱していく。

「あ、当たりませんよ！　ぜんぶ、見えますからっ！」

「生意気な！　これならどうだ！」

両者の視界の端、動くものがあった。――一般人、スーツ姿で小太りのサラリーマン、逃げ遅れたか。触手が彼を狙う。レイリープは一瞬も迷わなかった。

「ひいいいいっ！」

頭を抱えて悲鳴を上げるサラリーマン。だが彼は無事である。立ち塞がったレイリープが彼を守ったのだ。

「あうっ！」

彼女の背に激痛が走る。痛みを堪えながら、レイリープは叫んだ。

「は、早く逃げてください！」

「ああ、ああ！」

自分の娘よりも幼いであろう少女に体を張って守られたサラリーマンは、泣きながら頷くと、よろぼいながら逃げ出した。それを見てホッとするレイリープに、

「甘いっ！」

「なんのっ！」

振り向きざまに、放たれた触手を手刀でガードした。躱すだけではなく、腕でいなすことも覚えた。

再び猛烈な勢いで振るわれる触手を躱し、いなしながら、レイリープが吠える。

「今度は、こっちの番ですっ！」

イカトパスの触手攻撃を掻い潜り、あっという間に近づくと、腰だめから右の拳を放った。同時に、

「――闇を祓（はら）え、レイ・サンシャイン！」

右ストレートがイカトパスのぶよぶよした腹部に直撃し、さらに眩い光が打撃面から放たれた。

「にょほほほほあああああああああああああああああ！？」

ばぁんっ！

インパクトと同時に爆発のように光が弾け、体長3メートルを超す巨大なイカトパスの肉体が宙を舞った。吹っ飛ばされた。

神術陽煌（しんじゅつようこう）。

刃も銃弾も通さない魔族を滅ぼすことができる、神の浄化の光である。

イカトパスの肉体は、物理的な攻撃をほぼ無効化する。見た目通りのぶよぶよさだけでなく、奴の体や触手に纏わりつく闇の粘液がその機能を発揮する。

だがレイリープの神術陽煌を纏った右拳が触れた箇所から粘液が浄化され、物理攻撃の無効化を貫いたのだ。

――バカなっ、この俺に打撃を加えるなどとぉぉ！？

宙を舞いながら驚愕に呻くイカトパス。あの小さな体躯で、いくら神術陽煌を用いたとはいえ、このイカトパスをぶっ飛ばした。その事実に、魔王軍幹部は認識を新たにする。

一方レイリープの心境は、決して余裕のある者ではなかった。なぜなら、

――失敗しちゃった……！

振り抜いた右ストレートを即座に戻して構え直し、落下するイカトパスにすり足で接近しながら、レイリープは焦っていた。

そう、失敗したのだ。

物理無効を貫いたのは、あくまで失敗である。本来なら、あの『レイ・サンシャイン』を敵の内部で炸裂させるはずだった。ちょうど中国拳法における伝説の技、発勁のように。

だが『未熟』なレイリープはそのタイミングを外した。拳のインパクトの瞬間に『レイ・サンシャイン』を叩き込むはずが、僅かに速かったのである。

その結果、打撃にダメージが付与された形になり、イカトパスを吹っ飛ばしたのだった。

――今度は上手くやらなくちゃ……！

レイリープはこれが初陣である。初戦である。異世界から来た化物との、最初の殺し合いである。

ゆえに、経験の無さは当然であった。

「にょほほぅ！」

イカトパスが中空で身を翻す。十本の触手と二本の足をぐるりと回転させ、『空中での姿勢制御』という有り得ない行動を成功させる。大気に満ちる瘴気を蹴っているなどとは、いまだ未熟なレイリープには判断ができない。

「――やるな、陽煌天使！　レイリープといったか、貴様を一人の戦士と認める！」

音もなく、あの巨体で音もなくイカトパスが着地した。すでに右ストレートのダメージから回復しているといっていい。

「えっ？　えっ？　な、なにっ？」

相手のあまりの立ち上がりの良さに、レイリープは目を白黒させながら突進の速度を緩めた。警戒した――否、ビビったのだ。

だが経験豊富な魔族幹部は、もう敵を侮らない。己の持つ最高の一撃を放つと決めている。イカトパスの触手がゆぅらり、とゆっくりと動く。緩慢なそれなのに、しかしなぜか残像が生まれ、その内側に張り巡らされた夥しい数の『吸盤』が、きゅわっと一斉に開いた。

「――烏賊影触（いかげしょっく）」

じゃっ！

視（み）えなかった。

今度こそ、レイリープの目にも追えなかった。

「ふぇえっ！？　なんで、なんでっ！？」

気が付けば、レイリープの体は、イカトパスの触手に捕まっていた。蛇のとぐろのように体に巻き付いている。

「にょほほほ！　俺の勝ちだ、レイリープ！　意外とあっけなかったなぁ！」

高らかに笑うイカトパス。

奴の触手が巻き付いたレイリープは脱出を試みる。

「こんなの……！　天使さんの力ならっ……！　んぎぎぎぎぎっ！　んんぎぃぃぃ！！」

全身からオーラが発光し、ぐぐぐ、と触手の拘束が徐々に解けていく。

「にょほっ！？　なんて馬鹿力だ……！　この俺と力比べで劣らぬとは！　だが甘いっ！　こうなった時点で、貴様の負けなのだ、レイリープ！」

「な、なにをぉ……！　――んああっ！？」

突如、レイリープがおかしな声を上げ、押し戻していた触手が再び彼女の体に巻き付いた。レイリープが脱力したのである。

「な、なんでっ……？　力が、抜けて……！？」

イカトパスが高らかに笑う。

「にょーっほっほっほ！　それこそが俺の吸盤の力！　『エナジードレイン』よ！　貴様は俺の吸盤に触れた時点で、ハイ負け～～状態だったのだァ！　にょーっほっほっほ！」

「そんな、卑怯っ……うう、あああああっ！」

エナジーとは生きとし生ける者が皆持つ生命力。

特に天使と魔族は、エナジーを術に変えて超人的なパワーを引き出している。

そのエナジーが奪われるということはつまり、非力な人間へ近づくということだ。

「あああっ、あああああっ！」

どんどんエナジーを奪われていくレイリープは、ぎりぎりと締め上げる触手に圧迫され、苦しそうに呻き声を上げ始めた。

「うう、このっ……あああっ、痛い、痛いっ……！」

「ほーらほーら、どんどんエナジーが吸われていくぞぉ、レイリープ！」

「ああ、やめっ、やめ、て……！　あああああ痛い、痛い、痛いっ！」

レイリープは触手に持ちあげられ、ぐいっとイカトパスの元へ引き寄せられる。

「にょーっほっほっほ！　可愛い声を出すようになってきたなぁ！　くくく、このまま締め上げて全身の骨を折ってやろうか！」

その様子を想像したのだろう、幼い戦士の顔に、明確な恐怖が浮かんだ。

「――ひぃっ、そ、それは、やめてぇ、それは嫌ぁっ！」

彼女のその顔を見たイカトパスが、にんまりと笑った。嗜虐的な笑みだった。

「にょーっほっほっほ！　そうだなぁ！　それではつまらんなぁ！　もぉっと楽しませて貰うとしようかぁ！」

触手に巻かれたレイリープは、背後を振り向かせられた。そこにはいつの間にか戻ってきていた戦闘員たちと、奴らに捕まった一般人たちが座らされていた。

その数、ざっと百人。

戦闘員が三十、一般人が男女合わせて七十、といったところか。ただ女は七人程度で、やけに男が多かった。

――うう、ごめんなさい、私が負けちゃったから、みんな捕まって……。

すでにレイリープのエナジーはほぼすべて奪われてしまった。彼女はもう、非力な少女と変わりはない。

イカトパスの触手が、レイリープの両手を拘束して、彼女を吊るし上げた。爆乳がたぷん♡　と揺れて、むちっ♡　とした太ももが触手の粘膜でヌラヌラと卑猥にテカる。

「ただ殺すだけではつまらんからなぁ、レイリープ？」

禿オヤジを更に醜くしたような化物が、べろり、と美少女天使の頬を舐める。

そして、魔王軍幹部イカトパスは高らかに宣言した。

「陽煌天使の凌辱ショーの始まりだァ！　にょーっほっほっほ！」

「「うおおおおおおおおおおおお！！！」」

戦闘員たちが色めき立ち、そしてレイリープの顔から血の気が引いた。

化物どものけたたましい歓声のなか、レイリープが絶望の声音で「ヒロ君……」と呟いたのは、誰にも聞こえなかった。

魔の饗宴が始まる。

3　処女喪失・中出しされるロリ爆乳ヒロイン

陽煌天使（ようこうてんし）レイリープとは、羽咲（はねさき）あかりが天使の力を借りて変身した姿である。

なぜあかりが天使となって戦っているかの説明は後に回すとして、レイリープの活動にはもう二人、欠かせない存在がいる。

一人、あかりの恋人である、木村比呂（きむらひろ）。

もう一人、あかり達に力を与えた天使である。

では、あかりがレイリープとして戦っている間、この二人は何をしていたのか。

端的に言おう。見ていただけである。

いや、それ以外に何もできないのだった。天使はあかりに力を与え、念話を開いて比呂との通信を繋ぐくらいしか出来ず、また比呂も適時アドバイスと言う名の応援をする程度だ。

しかし、天使の力を得たあかりにはそれだけで十分なはずだった。今回の任務で最も困難だったのは、『戦士でもなんでも無い、喧嘩すらしたことのない普通の女の子』であるあかりを如何にしてあの場に立たせるかであり、それさえ果たしてしまえば後は陽煌天使として『体が勝手に動いて』敵を殲滅するはずだった。

彼女に力を与えたのは最高ランクの天使であり、気弱なあかりが戦えさえすれば勝利は確実のはずだったのだ。

しかし――天使は見誤った。幹部イカトパスの実力、そして魔王軍全体の力が、人間界に充満した淫気によって予想より遥かに強力になっていることに。

だから、正義のヒロインは敗北したのである。

☆

「い、いやあああっ！　離して、離してぇ！」

――くそ、あかり、あかり……！

レイリープこと羽咲（はねさき）あかりが、イカとタコを合わせたような気色悪い化物に捕まっているのを、木村比呂（きむらひろ）は歯がゆい気持ちで見つめていた。

ここは戦闘が起きていた場所だ。すぐ目の前にあかりと化物がおり、周囲には戦闘員どもや連れてこられた一般人の姿もいる。

が、比呂の姿は誰にも見えない。

あかりと比呂に力を与えた『天使』の術で、比呂はステルス化している。天使曰く、『その場に存在しない』状態になるため、ただ見えないだけではなく、物理的にも干渉できず、あらゆる感知に引っかからないらしい。

ゆえに、このような『恋人が今にも乱暴される光景』を眼前で目撃できるのだった。

「ひっ、やだ、そんなとこ触らないでぇ！」

あかりの悲鳴が響く。イカトパスの触手が彼女の胸を持ち上げたのだ。そのバカでかいおっぱいをより強調するかのように。

「にょほほ……。随分と卑猥に膨らんだ乳房だな、レイリープ。こんなものをぶら下げて恥ずかしくないのかぁ？」

かぁぁぁぁ、とあかりの顔が羞恥の色に染まる。彼女が小学生の頃から大きな胸にコンプレックスを抱いているのを、比呂は誰よりも知っていた。

『あかりっ、あかりぃっ！！』

絶叫する比呂だが、その声は彼女に届いていない。先ほどまでは確かに術による念話が可能だったはずなのに、今はぷっつりと途切れていた。あかり／レイリープが敵に捕ま

り、エナジーを奪われたからだろう。比呂はその念話術を使用していたもう一人の相棒を振り返って叫ぶ。

『め、恵（めぐみ）っ！　なんとか出来ないのか！？　あかりを助けなくちゃ！』

比呂の横には、小さな少女が雪のように静かに佇んでいた。

見た目は十歳くらいで、銀色のさらさらとした長い髪が神々しく、瞳も同じ銀色。素肌は病的なまでに白く、彫刻のような美貌には一部の隙もない。

思春期前の少女が醸し出す独特な清らかさも相まって、この世のものとは思えないほどの美しさである。

この世のものとは思えない――然り、彼女こそ、あかりと比呂に力を与えた天使、レイソフィーなのだから。

紆余曲折を経て、人間として『天使（あまつか）　恵（めぐみ）』の名を与えられた彼女だが、今となってはかつての力の大部分を失ってしまった。

現状、恵に戦う力はない。ガイドとしてあかりと比呂を導く立場である。

『恵！　あかりを助けなくっちゃ！』

彼女は首を横に振った。

『……堪えてください』

イカトパスに捕まっているあかりを冷静な目で見つめ、恵は淡々と口にする。

『現状、私たちに打開策はありません』

一瞬、何を言われたのかわからない、という顔をする比呂。

『そ、そんなこと！　黙って見てろって言うのか！』

恵は彼を見て、

『その通りです。今は静観すべき状況です。あなたと彼女に与えた『跳躍術』については説明したはず』

『だめだっ！　俺だけでも助けに行く！　透明化の術を解いてくれ！』

比呂が叫ぶ。彼の目の前では、恋人がその大きな胸を触手でぐにゅん♡　ぐにゅん♡と揉まれ、いやらしく形を変えていた。それも、大勢の戦闘員たちや一般人が見ている目の前で。

「いやぁっ、やだぁっ、見ないでっ、見ないでくださいっ！！」

あかりの顔は恐怖と羞恥による涙でぐちゃぐちゃになっており、その悲鳴を聞いているだけで胸が張り裂けそうだ。もう耐えられない。

だが恵は、

『許可できません。あなたが出ていっても何の助けにもなりません。それどころか、人質となり余計に事態を悪化させる危険性すらある。それにお忘れですか？　あなたが死ねば、アカリも死ぬのです』

『でも――っ！』

『耐えてください。そして、しっかりと見極めてください。彼女にエナジーが満ちるその瞬間を』

恵が正面に顔を戻す。その視線の先では、イカトパスが執拗にあかりの爆乳を揉みしだいていた。

「ひぐっ、いやぁぁぁぁ！　気持ち悪いっ、やめてよっ、やめてよぉぉっ！」

『あかりっ！！』

思わず駆け出し、手を伸ばした比呂だが、彼女の体に触れることは叶わなかった。まるでホログラムのようにすり抜けてしまう。

けれど、映像ではない。目の前に広がっている絶望の光景は映像ではない、リアルなのだ。

現実に、あかりが辱められているのである。触手の化物に。大衆の面前で。

それを比呂は、どうすることもできない。体を張って庇うどころか、止めに入ることも、彼女のために死ぬことすらできないのだ。

比呂の戦いは、恋人がレイプされるのを黙って見届けることなのである。

『あかりぃ、あかりぃ……！！』

地面に膝を付き、泣き叫ぶ彼女に手を伸ばしながら、小さい頃からあかりをずっと守ってきた少年は、無力感に打ちのめされながら、これから始まる地獄のような光景を特等席で見届けるのだった。

☆

コンプレックスである自分の大きな胸や大きな尻を、醜い化物にさんざん揉まれながら、レイリープは比呂との通信が途切れいていることに気付いた。

――なんでぇ、ヒロ君、なんでぇ……？

ガイド天使――恵の説明では、ガイドと比呂は『透明人間』になっていつも自分を見守っており、彼らとはいつも会話ができるし、戦闘行為はおろか喧嘩すらしたことのない自分に指示を与えてくれる、はずだった。

いや、途中までは確かにその通りだった。あかりの考えていることは比呂に伝わり、比呂の声もまたあかりの耳に届き、ガイドの戦闘指示は的確で、陽煌天使となった肉体は勝手に動いて悪い人たちを倒していった。

――なんで、聞こえないの……？　どうして、応えてくれないの……？

だが敵に捕まり、嫌らしいことをされ始めると、途端に通信が途切れた。

とつぜん放り出されたかのような孤独感。急に相手にされなくなったかのような焦燥感。

――なんで助けてくれないの、ヒロ君……！　なんでぇ、なんでぇ……！？

触手に全身を撫でまわされる嫌悪感のなかで、あかりはただただ疑問を投げかける。誰にも届いていないと知りながら。

――私がいやらしいことされるの、どうして見てるだけなのぉ……！？

拘束されて自由にならない身体の上を、触手がぬるぬると這いずり回る。内側にイボのような吸盤がびっしりと生えたそれは、動くたびにあかりの肌を刺激していく。

「うう、うっ、ひぐっ……うう……いやぁっ……うう……」

他人に、それも化物に、自分の身体を良いように貪られる気持ち悪さは、あかりの精神を絶え間なく削っていく。すでに彼女は、泣き疲れてぼんやりとした表情すら浮かべていた。何もかも諦めきった顔だった。

しかし、魔族の責め苦がこの程度で終わるはずがない。

「にょっほっほっほ、レイリープ、そろそろ始めようではないか？」

――え？

意味が分からなかった。

始める？　これ以上、何を？

ぼんやりとした頭に疑問が湧きおこったその直後だった。

イカトパスの触手が、レイリープの開いた胸元に入り込んだのだ。

「――ひっ！？」

本気で恐怖の声を上げるあかり。まさか、まさか、胸やお尻を揉むだけじゃなくて……！

「まずはこの邪魔な戦闘装束（レオタード）を剥かないとなぁ！」

化物が嗤う。ぐぐ、と触手が胸部に入り込む。あかりは腹の底から悲鳴を上げた。

「いやっ、やだっ、やだやだっ、やめてぇ！　脱がさないでぇ！」

「にょーっほっほっほ！　まさかとは思うがレイリープ！　貴様、あれだけで済むと思ったのか！？　なんと愚かな！　なんと無垢な女よ！」

「やだやだぁっ！　脱がしちゃいやぁっ！！　裸っ、胸っ、見られちゃうっ！！」

「にょーっほっほっほ！！　いいぞ、もっと叫べ！　そうすれば気が変わるかも知れんぞ！！」

イカトパスが触手をレイリープの胸元に引っ掛け、ゆっくりとずりおろしていく。

――やだやだやだっ……！　こんな大勢の人達に、おっぱいが見られちゃうっ……！

この場には逃げ遅れた一般市民がおり、彼らは戦闘員たちに囲まれて生殺与奪の権を握られている。

自分たちのために戦った少女が一方的に陵辱されるのをなす術もなく眺めていた。悔しそうに、悲しそうに、歯がゆい表情を浮かべている者が大半である。だが――なかにはスマホで動画を撮っていたり、好色そうな目で見ている者も確かに存在する。

そして戦闘員たちの囲みの向こうには、大勢の警察やマスコミ、さらに野次馬の一般人が押し寄せていた。

これまでも、警察は天使の戦いに介入してこなかった。したくても『出来ない』のだ。警察は魔族に有効な攻撃手段を持っていないからである。それゆえ、魔族が出現すれば天使たちの戦いの邪魔にならないよう、マスコミや一般人を避難させることに専念していた。

だがマスコミや野次馬は指示に従わない。

これはまだ、人間たちは知らないことではあるが――淫気の濃度が高いためだ。淫気に耐性のない一般人は、知らず知らずのうちに汚染され、判断力を乱されるようになる。

ここにいたら死んでしまうかも――そういった判断ができなくなっているのであった。

淫気の汚染が進むことにより、人間の精神が、魔族のそれに近くなっているのである。

その結果、魔族と天使の争う戦場を警察が囲み、その外側にテレビカメラや野次馬が集うようになった。道路にはテレビ局の中継車が並び、上空にはヘリやドローンが飛び、天

使と魔族の戦いを撮影していた。一般人も同様に、スマホやデジカメを使って戦闘を撮影し、ＳＮＳや動画サイトに次々とアップしていく。

そのすべてのカメラに、陽煌天使レイリープの敗北映像が捉えられているのである。

小さな体躯、あまりにも大きな胸、愛らしい容姿、扇情的なレオタードに身を包んだ美少女ヒロインのブザマな敗北シーンを、日本中が見ているのである。

その正義のヒロインが、今にも爆乳を晒されようとしているのを、日本中が見ているのである。

「み、見ないでください……！　見ないでぇ……！」

レイリープの涙ながらの懇願も、彼らには届かない。

「そーれ！　レイリープの下品に育った爆乳の御開帳だッ！！」

ジタバタと暴れるレイリープ。そのたびに、巨大な胸がぶるん♡　ぶるん♡　と動いてしまう。

「いやっ、やだぁぁ！　やめてぇ！　お願いやめてぇぇ！　いやっ――」

ばるんっ♡　と白い二つの球体が大きく跳ねる。

触手が一気に胸元を引きずり下ろし、レイリープの１２０センチを誇る爆乳が揺れて、衆目に晒された。

顔よりも大きな乳房は、しかし決して垂れることなく重力に抗っている。ぷっくりとした乳輪はピンク色で、五百円玉と同程度のサイズ。乳首は埋もれており、これもあかりの知られざるコンプレックスの一つだった。

「いやあああああああああああああああぁぁぁ！」

おおおお、という歓声が上がる。戦闘員だけではない、一般市民からもだ。

いつも恥ずかしかったこのブサイクに育った大きな胸が、大勢の人たちに見られてしまった――そのあまりの恥ずかしさに、レイリープは体を捻って叫ぶ。

「いやぁ、やめてぇ！」

その動きで爆乳が揺れる。デカいだの、大きいだの、揺れてるだのといった声が、レイリープの耳にも聞こえてくる。

「うう、なんで、こんな……なんでこんな、ひどいこと……」

隠したいのに、腕を頭の上で拘束されているため隠せない。誰にも見られたくないのに、大勢の人に見られて、写真や動画まで撮られてしまっている。

「ひどいよ……ひどいよぉ……」

「にょほほ、まだまだこれからだぞ、レイリープぅ」

声と同時、イカトパスの触手があかりの胸に絡みついた。

「ひぃっ！」

粘液を伴ったイボイボが、あかりの乳房を執拗に揉みしだく。

「にょほほ、まずはこの隠れた乳首を晒してやろう」

触手の先端で、あかりの陥没乳首をくりくりと攻められる。快感や快楽など一つもなかった。ただただ気持ちが悪く、そして怖かった。

「やぁっ、やめてぇっ、おっぱい弄らないでぇ！」

だが、徐々に肉体が反応していく。体の奥から熱くなって、胸の内で何かがうずうずする。

――なんでっ、気持ち悪い、だけなのにっ……！

あかりは知る由もないが、イカトパスの触手から分泌される粘液には、魔族にとっては当たり前の『催淫効果』が付与されている。戦闘装束（レオタード）を剥ぎ取られ、神的な防御力が激減した今となっては、その威力は絶大である。

――気持ち、いいっ……？　そんな、嘘、嘘……！

そんな彼女の心情に反応したかのように、あかりの陥没した乳首がぷっくりと姿を表した。綺麗なピンク色だったそれは、今はほんのりと赤みを帯びている。

「にょっほっほっほ！　どうしたレイリープ！　気持ち悪い触手に乳首を弄られて、感じているではないか！　天使というのはとんだ変態だなぁ！」

イカトパスはもちろん己の粘液による催淫効果が発揮されていることを知っているが、親切に教えてやるつもりはなかった。どうやら性行為への知識が乏しいらしいこの上玉を、最大限に辱めて楽しむつもりだ。

「ちっ、ちがっ――！　はぁんっ♡」

「何が違うか、レイリープ！　見ろ、人間ども！　天使のこの卑猥な姿を！　この女は辱められて悦ぶ変態なのだッ！」

くりくりくりくりくりくりくりくりくりくり！

「はぁんっ、やぁっ、やめっ、それやめてぇっ！！　違うのっ、違うのぉぉ！」

――おっぱいが、熱いっ……！　変なの、こんなの変だよぉ！　みんなに見られてるのにっ！　気持ち悪い触手に弄られてるのにっ！　どうしてぇ……！！

「ああっ、やだぁっ、だめぇっ、やめっ、やめてぇっ、あっ、ああっ――あああっ♡」

びくびく、とレイリープの小さな体が痙攣した。

「にょほぉ！？　まさかレイリープ、貴様イッたのか！　貴様があれほど気持ち悪いとほざいていた化物に乳首を弄られて、ブザマにイったのか！　にょほほほ！」

「ああっ……はぁんっ……ああ……♡」

――い、イく……？　わ、わかんない……。わかんないけど……。今のが……？

大きな波にさらわれたような感覚が来て、それから視界が真っ白になった。全身が敏感になっている。朦朧とする頭が徐々にクリアになっていくと、自分を見つめる大衆の視線が、その色が、軽蔑を帯びたものが多くなっていることに気付いた。

淫気に当てられている一般人たちが、自分たちのために戦って敗北した正義のヒロインへ、侮蔑の言葉を吐き出す。

「うわ、胸でイった……」

「マジかよ……変態じゃん……」

「あんな化物に……信じらんない……最低……」
「天使ってカッコイイって思ってたのに、幻滅だな……」
さぁっと冷や水を浴びせられたようだった。自分は今、とてもはしたない行為に溺れてしまったのだ。そしてそれを、見知らぬ人々に見られてしまったのだ。
「あああああっ……あああああああっ……！　あああああああああああああっ……！」
死にたいくらいに恥ずかしい。こんな大嫌いな胸を晒した無様な姿で吊るされているのも、そんな状態で『イク』という行為を見られてしまったことも。
「にょっほっほっほ、我の乳首責めは気に入って貰えたようだな？　レイリープよ」
「うう、うううう……」
イカトパスの言葉に、あかりは涙を流してうなだれるばかりだ。
「応える気力はない、か。まぁいい、ではこちらは勝手に楽しませて貰うとしよう」
まだやるつもりなの。
もうお家に帰して。
もう許して。
泣きながら、あかりはそう願った。それが叶わぬ望みと知りながら。
「次はいよいよ――あそこだ」
「な、なにを……」
「にょほっ！　決まっているだろう？　貴様のメスの部分をしっかり見せて貰うのだ」
「おんなの……？　――いや、いや、だめ、だめぇっ！」
呆然としたあかりの顔が、再び恐怖の色に染まる。
「にょほほほ！　良い悲鳴だ、レイリープ！」
怪人は聞く耳を持たない。その触手があかりの両足を持ち上げ、あかりは吊るされながらM字開脚をする格好になる。
「やぁ、パンツ、見ちゃだめぇ！」

「にょほほほ！　すでにぐっしょり濡れているではないか！　この淫売のド変態め！」

怪人の言う通りだった。あかりのショーツはお漏らしでもしたかのように、卑猥な染みを作っていた。先ほどの触手による全身愛撫と乳首責めによって感じ、分泌した愛液によって。

「やだっ、やだぁっ！」

「にょっほっほ。では中身も見させて貰うとするか！」

「な、なか――！？　だめぇ、それは絶対だめぇっ！」

イカトパスは部下の戦闘員から大振りのナイフを受け取り、触手で持つと、あかりのショーツに刃を添わせた。あかりの内股に、鋼の冷たさが触れる。

「いやあっ！　やめてぇ、皆が見てるのにっ！　やめてぇ！！　まだヒロ君にも見せたことと無いのにっ！　だめ、だめぇーーーーっ！」

びりっ、びりびりっ！

イカトパスは触手で持ったナイフで、あかりのショーツを切り裂いた。そうして剥ぎ取ると、あかりのアソコが露わになった。

ぴっちりと閉じた可愛い割れ目。陰毛は薄く、子供らしさを残している。穢れの無い処女の性器だった。

「いやあああああああああっ！　やだっやだぁっ！　見ないでっ、みないでぇ！！」

顔を真っ赤にしてイヤイヤと首を振るあかり。

「にょほぉん……素晴らしい処女のスメル……！　これは期待できそうだ……！」

イカトパスがあかりのアソコに顔を近づけると、くんくんとその匂いを嗅ぎ始める。その行為にあかりは恐怖する。

「ひっ、ひぃっ……！」

イボイボの付いた触手があかりの秘部を撫でまわした。催淫効果のある粘液をこすり付ける。すると、

「ひぃやあああん……っ♡」

あかりの背骨に電撃が奔った。あられもない声を出してしまい、慌てて口をつぐむが、時すでに遅し。その嬌声は、イカトパスはおろか、戦闘員や、一般市民にまで聞かれてしまった。

「聞いたかよ、今の声……」

「ああ、めちゃくちゃ感じてたぜ」

「恥ずかしくないのかしら」

そんな声が聞こえてくる。

「ち、ちがっ……！」

「にょほほほ！　ずいぶんと気持ち良さそうだなぁレイリープ！　そぉれ、もっとやってやるぞ！」

「ひゃああんっ♡　やっ、やめっ、いやぁぁっ！　あっ、ああっ♡　だっめっぇ♡」

細かいイボの付いた触手が、あかりの幼いアソコを歯磨きのように行ったり来たりする。

「あっ♡　やめっ♡　だめっ♡　それっ♡　あんっ♡　やめっ♡　やめぇっ♡」

別の触手が近づいてくる。それは先端がぶわりと割れて、更に細かい触手となった。糸のように細い触手はあかりのアソコに絡みつき、ぴっちりと閉じた割れ目を開いていく。

「いやっ、開けないでっ、怖いっ怖いぃぃっ！」

自分でも広げたことのないアソコを、未知の生物によって『くぱぁ』と広げられてしまう。その恐怖と羞恥に、あかりは頭がおかしくなりそうだった。

「いやぁ！　いやぁぁぁぁあ！！」

「にょほほほ！　これが正義のヒロインの処女マンコかぁ！　綺麗なピンク色だなぁ！」

「やだっ、やだっ、いわないでっ、言わないでぇ！」

「そーれ、中に入っていくぞぉ？」

あかりの広げられたアソコに細い触手が群がっていく。

「ひぃぃぃ！　いやぁ、怖いっ、怖いのっ、やめてぇ！」

隠れているクリトリスの皮を剥き、包み込むように愛撫する。未知の刺激に、あかりの全身が跳ねた。

「ひぎぃっ！？　んあああっ♡　やだっ、なに、なにしてっ！？　それやだぁっ！！」

「にょほほほ！　ロリマンコには少々刺激が強すぎたようだなぁ。だがそれもすぐ良くなるぞ！　なにせ貴様は変態のようだからなぁ！」

「やだっ、やだやだぁっ！　んあああっ！？　そこっ、やめてぇっ♡　びりびりするのっ、びりびり感じちゃうのやなのぉっ！」

もちろんこれは触手粘液の催淫効果である。だがそうとは知らないあかりは、怪人の言葉を鵜呑みにしてしまうのだった。

――私、私、こんなにいやらしい子だったの……？　こんなにえっちな子だったの……？　だからヒロ君は助けてくれないの……？

細い触手は乳房にも群がり、びんびんに勃った乳首をも執拗に責めていく。

「ああっ、やだっ、おっぱいやめてぇっ！　あそことおっぱい同時に虐めるのだめぇっ！　あああんっ♡」

乳首とクリトリスの両方を責められて、はしたない喘ぎ声と、とめどない泣き声を上げながら、あかりは絶望と快楽に沈んでいく。

「だめっ、だめっ、またイっちゃう！　またイっちゃうのぉ！　化物にイかされるのいやぁっ！　いっ――あああああっ♡♡」

びくびくんっ♡　とレイリープの全身が跳ねた。はしたない爆乳を揺らし、幼いマンコから愛液を垂らし、顔は涙で、口は涎でまみれ、陽煌天使レイリープはイかされたのだった。

「うあっ……ああっ……あぅん……」

あかりを後ろから吊るすイカトパスが、その様子を見て舌なめずりをする。

「にょほぉ……たまらんなぁ。では、そろそろ頂くとするか」

イカトパスの触手がぐにょり、と形を変えていく。それまではイカとタコのように先端が細くなる形状だったが、逆に膨らみ始めたのだ。今や化物の触手は全て、蛇の頭のように盛り上がっていた。

まだ、『それ』を見たことがなかったあかりは、キノコみたいだと思った。

しかし周りを囲む一般人や、戦闘員たちはもちろんわかっている。キノコではなく、亀の頭であると。

あかりが不思議そうな顔をしていることに、イカトパスは気が付く。

「にょほ？　おいまさかレイリープ、貴様これを見たことがないのか？」

「……ば、化物の足は、見たこと、ない、です」

すっかり戦意を失ったあかりが素直にそう答えると、イカトパスは一瞬きょとんとして、

「にょーっほっほっほ！　そうかそうか、コレを見るのは初めてか！」

嬉しそうに、実に嬉しそうに、高らかに笑った。

「……？」

何を当たり前なことを……、とあかりはぼんやり考える。考えながら、ケタケタと笑う戦闘員を見る。それから、辛そうに目を背けたり、あるいは期待の籠った視線をあかりに向ける一般人を見る。

――知らないのは、私だけ……？

なにか、途轍もなく嫌な予感がした。これまでのが全て『遊び』だったような、本番前の『余興』に過ぎなかったような――。

そしてそれは正しい。

羞恥・乳首責め・クリトリス責めなど、正しく、本番『前』の『戯』れそのものだったのである。

「では教えてやろう、レイリープ」

途方もなく邪悪な顔で、イカトパスがあかりに告げる。

聞きたくない、とあかりは思った。だがそれは叶わなかった。醜い化物は、あかりの耳元で愛を囁くように、そっと口にした。

「これは男性器だ」

――だん、せい、き……？

いまだ理解が及ばない――理解することを否定している様子のレイリープへ、イカトパスはにょほほほと笑う。

「チンポだよ、レイリープ！　チンポチンポチンポ！　これを今からお前のマンコに突っ込んで、セックスするんだよ！！」

汗と涙と涎にまみれたあかりの顔が、一切の表情を失った。

――うそ。

「にょーっほっほっほ！　まさかこの期に及んでまだ理解できんのか！　天使がここまで馬鹿とはなぁ！　わかれ！　理解しろレイリープ！　これからお前は俺にレイプされるんだよ！！」

ぶるる、とあかりの体が震えた。その顔が徐々に変化していく。もう何度目かの、絶望の色に。

「……いや」

「あぁん！？」

「……いやっ、やだっ、だめぇ、お願い、お願いしますっ、それだけは、それだけはやめてくださいっ！」

あかりは自身を抱えるイカトパスを振り返って、必死に懇願した。陽煌天使のプライドも尊厳も、何もかもを投げ捨てて、ただただ願った。

「処女は――処女だけはやめてくださいっ！　お願いしますっ、お願いしますっ！　何でもしますっ！　えっちだけは、えっちだけはやめてくださいっ！」

「にょーっほっほっほ！　良い反応だレイリープ！　だがまだ足りんなぁ！　もっと泣け！　懇願しろ！　そうしないと――」

ぐぐぐ、とあかりの処女マンコに触手チンポが近づいてくる。

「お、お願いしますっ！　それだけは、それだけはやめてぇっ！　私、私、まだ……」

周囲の人間が聞いていることも忘れ、レイリープは懇願する。

「初めては、初めては好きな人とがいいの……！　もう決めてる人がいるの……！　だから、それだけは、お願いっ……！」

「にょーっほほほほほ！　これはいい！　好きな男がいるだとぉ？　にょほほほ！　まだヤってないとはなぁ！」

「うう、そ、そうです……。だからお願いします、それ以外だったら、何でもしますからっ……！　おっぱいも、お口も、好きに使っていいですから、だからっ……！」

「にょーっほほほほほ……。それを聞いてますます犯したくなったぞ！」

「そ、そんな、やめて、やめてっ、だめぇぇ！」

触手チンポが伸びてくる。にゅるり、とマンコと恥骨の上を滑らされて、「ひぃぃ！」とレイリープが恐怖の悲鳴を上げた。触手男根が、ゆっくりとレイリープの固く閉じた割れ目に近づいていく。レイリープは泣きながら懇願する。

「お願い、お願いしますっ！　それだけはやめてくださいっ！　やだぁっ！　いやぁっ！　お願い、誰かっ、誰か助けてぇ！」

人々を助けるはずの天使が、人々に助けを求める無様な姿。だが、立ち上がるものは誰一人としていない。

触手男根が、レイリープの割れ目にぴったりとくっついた。

「どうだレイリープ。お前のマンコに、俺のちんぽがキスしてるぞ～？　このままちょいと力をいれれば、お前の初めては俺のものだ」

恐慌状態となったあかりが、両手両足をばたつかせて泣き叫ぶ。

「いやぁぁぁ！　お願い、お願いっ！　初めては、初めてはヒロ君とがいいのぉ！　ずっと、ずっとそう思ってたのぉ！　気持ち悪い触手なんていやぁぁぁ！」

「にょーっほっほっほ！　そうとも、その気持ち悪い触手にお前が大事にしておいた処女が奪われるのだ！」

「やだぁっやだぁっ！　やめてっ、本当に、本当にやめ――――ひぎぃぃぃ！？」